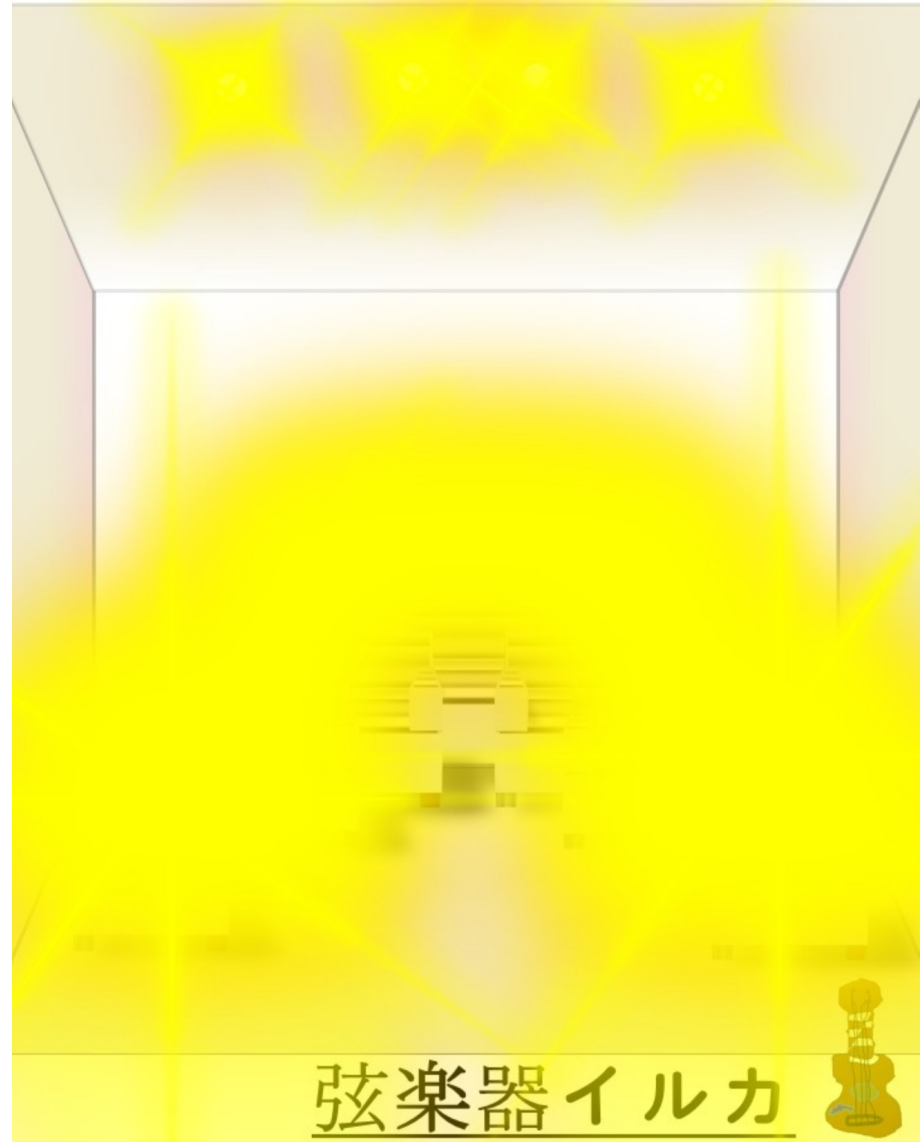


俺だけが転生しない密室



弦楽器イルカ



目次

プロローグ	1
1 はじまりは戸締り	1
2 情けは誰が為に	8
3 晴れた日には空を仰いで	11
4 さして映えない死因	15
5 クモの惑星	18
6 まつりまつられつりつられ	21
7 出る杭は打たれて突き抜ける	23
8 血も涙も愛も	25

プロローグ

きっかけは、フルーツバスケットだった。
正確には、フルーツバスケットの拡張版、なんでもバスケットとも呼ばれるゲームだ。
まさかそんな。軽い冗談のつもりだった。

「それじゃ、その。…実は自分は、異世界からの転生者だよーっ、って人」

誰も席を立つはざがない。軽い笑いが起こるだけ。そう思った。目の前の男女9名が、一斉に立ち上がるのを見るまでは。

しかし一番驚いているのは質問した俺よりも、立ち上がった9名の方だったのかもしれない。

「え！ ウソ！」

「マジで？ 僕だけじゃなくて？」

「みんな、そうなの？」

「まさか、俺だけだと思ってたのに！」

各々が驚嘆の声を上げ、それぞれの顔を見つめている、そんな密室。

1. はじまりは戸締り

その夜、たまたま離島のペンションとホテルの間のような宿泊施設に、ビジネスや観光の目的で10名の男女が宿泊していた。

辺境ということもあり、施設の管理者は17時には不在となり、家に帰ってしまう。翌朝、宿泊客は鍵をフロントに置いて帰るシステムだ。

季節は秋から冬への変わり目だが、19時過ぎに、突然の暴風雨が施設を襲う。

各部屋の天井に設置されたスピーカーから甲高い音が鳴り、緊急の館内放送が流れる。

島内は外出禁止のため、宿泊客が自ら、各部屋の窓と玄関のシャッターを閉めていただけるよう、お願いいたします。

それぞれの部屋の窓ガラスが割れないように、各々で窓の外にあるシャッターを下ろす。また、玄関のシャッターを閉めようとして、ちょうど宿泊客が全員、玄関前のロビーに集まり、その中の男性二人が、玄関の外側にある頑丈なシャッターを閉めた。

これで、完全な密室である。

少しばかりの緊張と不安で、なんとなくロビーに集まったみんなが、そこに1台だけあるテレビをつけて緊急速報を眺めている。

「こわいですね」誰かがつぶやく。

「そうですね。：なんか、修学旅行みたいな感じもあるけど」少し笑いが漏れる。

「修学旅行と言えば、枕投げとか。懐かしいですね」

「気分転換にコイバナでもしますか？」さすがに飛ばし過ぎたジョークだ。

「コイバナはちょっと。自己紹介もしてないし」

「自己紹介か。そういえば小学校で昔、自己紹介代わりのフルーツバスケットをしましたね」

何気ない一言のつもりだったが、なぜか全員が俺のほうを見た。まさか、本気でやるとは思わなかった。だっ広いビクトリアンスタイル風のロビーに椅子が人数分あって、館内で唯一のテレビがロビーに1台だけあって、まだ19時台で寝るまでに時間もあった。密室に閉じ込められたお互いの素性を少しでも知っておきたいとか、さらによく見ると割と同じ年代の、20代半ばの男女10名だったことも、たぶん少なからず関係あったのかもしれない。

恋リアとまではいかなくとも、学生気分がまだ少し残っている年代の、新しい関係性が生まれるかもしれない期待と不安が渦のように絡み合っている暴風雨の真ん中で、天井のシーリングファンから吹き

降ろされる風が少し興奮を帯びている気さえる。

「：じゃ、誰から始めますか？」

「まずは、フルールバスケットを提案したあなたから」

9名の男女が半円形に俺を囲んで椅子に座り、俺の口から発されるであろう次の言葉を見守っている。別に提案のつもりはなかったので照れくさいながらも、急いで質問を考える意識が、完全に外の暴風雨からは離れていった。

「それじゃ、その…実は自分は、異世界からの転生者だよーっ、って人」

軽いつかみのつもりだった。不安を紛らわすための冗談。

しかし、目の前の男女9名が、何かにつかれたようにすくつと立ち上がるのを見た時、俺は驚きより先に恐怖のような悪寒が背筋を走った。

「え！ウソ！」

「マジで？ 僕だけじゃなくて？」

「みんな、そうなの？」

「まさか、俺だけだと思ってたのに……」

互いに質問し合う9名を横目に、俺はとにかく、ワケはわからないがルールなので、一番近い左端の空いている椅子にとりあえず座った。

「え、今？」

「座る？ この状況で？」

椅子の前に立っていた男女が、驚きの表情で俺を見下ろしてくる。そんなこと言われても。

「ってか、本当なの？ みんな転生者って」

「どこから？ みんなどんな異世界からこの現世に転生してきたの？」

無言で見上げる俺を無視する各々の声が驚きで大きくなっていくらしく、高い天井のロビー内で言葉が粒のようにぶつかり合って反響し、一人一人の会話をうまく聞き取ることができない。

「ちょっと待って。一旦、落ち着こう。一回、真剣に自己紹介しない？」

「そうね。じゃ、向かって一番右端の人から」

俺から一番遠い反対側にいた男性が指名された。

「あ、俺は異世界から来ました。あ、みんなそうか。異世界での職業は、魔王でした。あ、職業って言うか、魔界の王でした。じゃ、次、隣の方」

「あ、ボクは、異世界ではみんなを怪獣から守る、ヒーローでした！ よろしく！ どうぞ、次の方」

「あたしは、のどかな村に住んでいる子供でした。事故で光のエネルギーの魔法が暴走してしまい、光の粒が空から降ってきました。それが善なのか悪なのか、その影響を調べられ、治療が必要と診断されたあたしたちは、体の一部に印が残る治療魔法を受けました。あ、長くなるので、次の方……」

「オレっちは小人症の宮廷道化師だったグシャ。金持ちの魔除けとして、モノマネや軽口をたたくペットとして飼われていた愚者だったグシャ。グシャシャシャ。次いくグシャ」

「ワレワレは、宇宙生物でした。ある惑星の先住生物を根絶やしにして、平和な生活を送っていました。では、次の生物は……」

「神だ。我は創造主として、ある異世界を作った。しかし、神が別の異世界に転生するとは思わなかったな。次はお前だ」

「あ、ウチは細胞でした。普段は魔法を使う悪役令嬢でしたが実は女装で、真の姿はモフモフケモミミスパダリBL男性の脳内にある、ニューロン細胞の一つでした。小さいながらサブにドムの指示を出すためビリビリ働いていました！ 次の方はどんな役割でしたか？」

「つまり、魔法使いで意地の悪い令嬢の衣装をまといつも、実は獣の耳と毛が生えているイケメンかつ支配的で攻める側の同性愛者の男性の脳細胞だったんですね。かくいうワタシは、人々を笑顔にする愛玩用のAIでした。しかしなぜ一介のプログラムにすぎない私が現世で生物に転生したのか、ずっと考え続けています。次の人はいかがですか？」

「私は、ある王国の第三王女でした。みなさんのように自己紹介できる特徴がないので、すみませんが。それでは次は、椅子に座っていらっしゃるあなたが最後ですよ。あなたは異世界でどんな暮らしをされていたのですか？ このフルーツバスケットを提案されたということは、もしか、全てを見通せる預言者だったのでしょうか？」

必然的に左端に座った俺が最後になることは、みんなの自己紹介の途中で気づいていたのだが、異議を申し立てる隙など全くない雰囲気にもまれ、さっきから冷や汗が止まらない俺は……

「俺？ 俺は、その、今、大学院生で、異世界物の小説を書く素人の作家をしています」

「まあ、異世界では作家さんでいらっしゃったのですか？」

「いや、異世界ではなくて、今の、この現世で……」

そりゃそうだ。第三王女をはじめ、俺以外の9名全員が不思議そうな顔で俺を見下ろしている。

「では、異世界では何を？」

「あの……。転生してないです」

「え？」

「いや、転生って。だってそりゃ、当たり前でしょ？ 確かに、もしかしてなんかあったらって淡い期待して、なんなら忘れしてるだけなのかって、皆さんのおかしな自己紹介聞きながら必死で異世界の記憶を思い出そうとしましたけど。ないよ！ あるワケないジャン。でもだって、普通は俺の方が普通であって、皆さんの方が非常識だって、ってか今この空間自体が異世界って感じで」

「……ああ」

「ね、そうだ、そりゃがっかりするよね！ でも、困ってます。…嘘ですよ？ さっきからみんな、自己紹介。ノリで嘘ついてるんでしょ？」

憐れみを浮かべた9名の表情と、救いを求めて目が泳ぐ俺。バタフライのように激しい瞬きをしながら救いの浮き輪を求める溺れかけの俺の瞳に映ったのは、意外にも魔王だった。

「おほん。ワガハイは嘘なとつかん」

「ワガハイ？ さっきは私でしたけど？」

「いや、みんなが一人称を改めたので、ワガハイもワガハイと名乗るが。ワガハイは魔界の王として魔物軍団を率い、弱き生き物どもを支配してきた」

「本当ですか？」

「魔王であるワガハイを疑うのか？」

「むしろ魔王って信用できるんですか？」

「待ってください」

不毛な水掛け論に割って入ったのは、第三王女だった。

「確かに、元魔王の言うことなんて信用できない、それはみんな同じ気持ちです」

「マジか！」

「でも、私にまかせてください」

第三王女はそういうと、両手の平を頭上に掲げた。

「まさかオヌシ、現世でも魔法が使えるのか？　ワガハイも何度も試したが、元の異世界の能力は何一つ発現しなかったぞ！」

「いや、魔法ではないのです。古代から王家に伝わる血文字の著術です」

「なに？　それはいったい？」

「うまく言語化できないので、感じてください」

そう言うのと、第三王女は掲げた10本の指で空中を引っ搔くような動作を、まるで大気にタイピングしているかのような……

「見える、ワガハイの眼前に元の異世界の風景が！」

「転生者じゃない俺にも、確かに。…しかしこれは？」

「他者のイメージを文字化して共有しています。見てください。あれが元の異世界の魔王です」

そこでは、過剰に魔な感じの魔王が勇者をなぶり殺しにしていた。

「あれが魔王。魔が過ぎる！」

「ガッハッハ。もちろんこの現世では穏便に暮らしておるが、異世界では歯向かうものは皆殺し、やりたい放題じゃった」

「でも、転生してるってことは、やっぱりホラ、セオリー的には一回死んだってことですよね。やりたい放題とかカッコつけて、結局、もっと強い勇者に殺されたんですか？」

「ふ。オヌシ、異世界だったら八つ裂きにしておったぞ。勇者なぞ、ワガハイの足元にも及ばぬわ」

魔王の支配は完璧だった。武力というムチだけではなく、生かさず殺さずのアメも使い分けていた。弱者から年貢や税金や生贄などの搾取を行いつつも、程よい自由も与えることで、弱者同士が無気力かつ小競り合いをするように仕向け、さらに配下の魔物どもに弱者への監視を徹底させた。

「ふふ。それでも監視を突破する勇者も数名いたが、所詮ぬるま湯の自由で育ったチルい勇者など全て返り討ちにしてくれたわ！」

「すごい！　第三王女の著術のおかげで、魔王の支配のいやらしさが立体的に可視化できました！　チョジュツも著術って書くんですね！」

「悔しいがワガハイも説明ゼリフを大幅に短縮できたぞ！」

「魔王、ではなぜ死んだんですか？　寿命が来たってことですか？　魔王に寿命ってなさそうですけど？」

「いや、寿命ではない」

魔王は弱者への支配に気を取られるあまり、配下の魔物軍団に充満していた不満を解消することがで

きなかった。弱者からより厳しく搾取しろ、迫害して殺せと叫ぶ不満分子の魔物どもを無視するだけでなく、反乱分子として処刑までしていた

「それで、自分である魔物のテロにあったってことですか？」

弱者をこれ以上こき使い搾取したところで資源は増えないことを、魔王は知っていた。むしろ死を意識した弱者の群れに反乱されるだけ。

しかし配下の魔物どもは、もっと喰らいたい、もっと交尾したいと魔王に要求した。その貧しさのけ口が、弱者への暴力や迫害へとつながった。

このままでは全滅の危機を察した弱者の群れは窮鼠となり、必死に甘言を弄し魔物を謀った。魔王を倒せば、もっと資源を独り占めできると。そして弱者はひそかに作った武器を魔物に渡し、魔王はその武器によって魔物どもに倒されたのだ。

「その後はどうなったか、わかるんですか？」

「：倒されたワガハイはすぐ眩い光に包まれ赤子として現生に転生したので、その後の異世界のことはわからんが。たぶん、バカな魔物どもは、弱者の群れに倒されていたかもしれんな。知恵の優秀はときに単純な暴力を圧倒する力がある」

「では、弱者の群れが勝ったと」

「さて？ 逆にあるいは、弱者どもは魔物に蹂躪され、全滅したかもしれん」

「しかし、魔王が倒されたことで、みんなが平和的に生活できた可能性はないんですか？」

「ワガハイは魔王だが、搾取するだけが魔王ではない。むしろ程よく分配を行っていた。分配する先導者のいない烏合の衆の未来は悲惨だと心得ておる」

「魔王として私利私欲は肥やさなかったと」

「愚か者。私利私欲を肥やさぬ魔王などおるか！ 魔王たるもの、私利私欲を肥やすのが嗜みぞ。：しかし、そうだな。確かに少し、肥やし過ぎたのかもしれない。魔物どもには骨だけではなくわずかな肉もしゃぶらせねばならなかったか」

「犬じゃないですからね。つてか、犬も骨だけじゃ死にますし。その認識だと、自覚されているより相当厳しい支配をされていたのかも」

「そうじゃな。弱者どもも、魔物どもも、どちらも豊かに暮らしていれば、あるいはもう少し平和的に共存できたのかもしれない。ワガハイはそれを学ぶために、現世に転生したのかもしれない」

「そうかもしれないですね」

「小僧。ワガハイがもし再転生する機会を得られたなら、そのときは魔物と弱者どもが共に妥協できるギリギリのアメとムチで異世界を支配出来る気がしてきたわ。貴様と話したおかげだ。ガッハッハ」

そのとき、暴風雨が館に衝突したような轟音と共に、二つの大きな明るい光が眼前に迫り、笑顔の魔王を飲み込んで消えた。眩さと衝撃で目がくらみ数秒間、倒れ込んだみんなが起き上がると、魔王はどこにもいなかった。

「え？」

「今の、何？」

「あの、…トラックじゃないですか？」

「え？」

「光の感じとか。大型のトラックの間隔じゃなかったですか？」

「大型トラックのヘッドライト。確かに」

ヘッドライト、大型トラック、魔王の笑顔、そして転生……

「僕は、死にません」

「いや、そいつは魔王でもないし転生もしてない」

「ですよ」 つまらない冗談だ。

「とにかく、これでわかりましたね」 第三王女がキラキラした目で俺を見た。

「あなたが魔王に気づきを与え、改心した魔王は、転生トラックに惹かれて成仏しました」

「え、認識違くない？」

「冗談です。きっと魔王は元の異世界に再転生してもう一度、程よい支配と言う名の搾取を始めたのではないのでしょうか？」

「搾取はするんだ」

「魔王ですから」

「そうだね。外国人に土地を買われるのが嫌なら、国民が先に全部買えばいい。声高に叫ぶ人から順に金を出して、クラファンでも使って、自分の責任で金を出して国を守ればいい。それをしないのは国民が他人任せで弱いのと、貧しいから。国民が弱くて貧しいから、より弱く貧しい外国人への迫害が起こる。迫害が起これば争いも起こるし、最悪それで外国人が全員いなくなったら」

「海外の金持ち武器商人が、いよいよ戦争を全力で持ち込ませて、殺し合いで大儲けするでしょうね。武器商人も人でなしじゃないし、殺し合いたい者のために武器を売るのは正義ですからね」

「間違っても武器商人自身が殺されないように、自分とは関係ない土地で関係ない連中が殺し合いたくて殺し合うための武器を売るからこそ、彼らのマーケティングの基本だからさ」

「自分が武器商人だったらどこの誰をどう誘導して武器を売るのが最も得か？ 自国に戦争を持ち込まないために逆算するのが賢い選択かもしれませんね。しかしこのアフタートークみたいな、余分なお説教みたいな会話もコミで、全転生完了ってことですか？」 第三王女の瞳が眩く光る。

「…俺に聞く？」

「でも、あなたがフルーツバスケットを提案しなければ、魔王も再転生することはなかったでしょう？ 最後に魔王の背中を押してトラックに飛び込ませたのもあなたでしたし」

「それはしてない。だいたい第三王女だって自己紹介では謙遜してたけど、魔王の再転生に著術で加担してたし」

「…つまり私たちは、共犯者ってことですね？」

いたずらがバレた子供のように笑う第三王女の笑顔に、続く言葉を飲み込んでしまう俺。

「あ、言い過ぎてたらごめんなさい。とは言え、私も自分が異世界から転生した理由を知りたかったのですが。まさかこんな形でその可能性がやって来るとは、いろいろ不安な気分です」

「…そう」

「あなた、本当に転生者ではないのですか？」

「いや。俺は、本当に、何も知らない」

「そうですか……」

ロビーを静寂が包み込む。

「…あの！」

その静寂を破り口を開いたのは……

つづく

2. 情けは誰が為に

「あなた、本当に転生者ではないのですか？」第三王女が俺に尋ねる。

「いや。俺は、本当に、何も知らない」

「そうですか……」

魔王が去ったロビーを、静寂が包み込む。その時。

「…あの！」

突破口を求め口を開いたのは、たしか二番目に自己紹介した……

「ボクは、元の異世界では怪獣を倒すヒーローでした！ 僕も異世界にやり残したことがあって、魔王さんのように再転生できるのなら、ここで思い切って話したいです！」

さりげなく第三王女の方を見てしまう俺。どうぞ、話し相手になりたいそうですよ、ヒーローさんが。

「いや、あなたにだよ。作家さん」

「俺？」

「当たり前でしょ。ここにいるみんなの転生を見抜き、魔王さんを異世界に戻したのは、どう見たって作家さんでしょ？」

「それはどうですかね。魔王さんは本当に成仏しただけかも。それか全く別の事情があって」

「んなワケないでしょ。怪獣が暴れたら必ずヒーローが現れるように、転生者が光って消えたってことは、元の異世界に再転生したとしか考えられないよ」

謎に確信する押しの強さが、ヒーローのヒーローたる所以なのかもしれない。その勢いに気圧される俺。

「…はあ。じゃ、話を聞くくらいなら。でも、元に戻るかは……」

「私も協力します！ 作家さんだけにお任せしては気の毒ですから」第三王女がそう言って、俺の後ろからヒーローに呼びかけた。先ほどよりなんとなく、生気で目が輝いているようにも見えた。

「二人ともありがとう。それでは話させてください」

同時に、眼前に山深い森が現れた。第三王女の著術が発動し、山中でうずくまりながら地面に鉄製の

何かを設置しているヒーローの姿が見える。

「あれは何をしているのですか？」

「怪獣を倒すためのワナを設置しているんだ」

「ワナ？ ワナで怪獣を？」

「え、ダメ？」

「いや、そんなことは。ただ、ヒーローが怪獣を倒すと聞いて、俺はてっきり、ねえ？」

「そうですね。私も、…てっきり」

「てっきり？」

すると、黒い塊がワナに近づき、バタンと音がして、あの、大きな爪と、つんと上向きの鼻と……

「え、あれ？ クマ？」

「いや、ケマ」

「ケマ？」

「現世よりちょっとだけ凶暴って言うか、獣臭いって言うか、そういう怪獣」

「え？…あ！じゃ、怪獣って、ひょっとして害獣のことですか？」

「いや、厳密には違うけど。ボクの異世界では、クマのような害獣を怪獣と呼び、狩猟免許を取ったハンターをヒーローと呼んでただけ。それが何か問題でも？」

「いえ、素晴らしいです！ 現世の怪獣はフィクションですから。むしろ実在する害獣に立ち向かってこそヒーローですよ！」

元の異世界では、危険な害：怪獣から地域住民を守るため、ハン：ヒーローは必死に、狩猟免許を取得し、ワナを仕掛け、ゾーニングの為の草刈りに協力したり、銃器の取り扱いにも厳重に注意しながら、日々活動していたのだ。

「でもね。…ネズミの相談、って童話を知ってる？」ヒーローが少し寂しげに語り出した。

猫に食われるのを待つしかないネズミたちは、ある夜に必死で相談し、猫に鈴をつければ音で察知して逃げ切ることができる、という妙案を思いつく。しかし、誰が鈴をつけるかという段になった途端、ネズミたちは一様に黙りこくuri、議論は立ち消え、一匹また一匹とその場から立ち去って行った。世界各地でよく知られた寓話だ。

「怪獣殺すなの否定も、ヒーロー頑張れの肯定も結局、他人任せで誰も自分が鈴を付けにはいかない。ヒトに優しい時代は素晴らしいけど、怪獣には厳しくしないと、ヒトは守れない。嫌な部分を見ないフリして、何も介入しない面倒くさを優しさと言い訳して、ただ口だけの無責任さで何か成し遂げた気になって。そういう優しさが暴走した異世界に、ボクは嫌気がさしたんだ」

「それで、結局、あなたは、どうして…？」

「ボクが怪獣に倒されたのか、異世界に絶望して自ら…なのか、はたまた病気が事故か、それは重要なことではない」

なんとなく義務で聞いてしまった、本心から聞きたい質問ではなかった。恥ずかしさと後悔が押し寄せる。

「…すみませんでした。立ち入ったことを聞いてしまって」

「いいよ。それよりもボクは異世界にやり残したことがあるんだ」

「それは何ですか？」

「契約がしたいんだ」

「え？」

「つまり、契約する社会を作りたいんだ。ヒーローが突然現れて、暴れる怪獣を倒して去っていく美談にはしたくない。そういう社会は再現性がないから。ヒーローが死んだら怪獣に襲われて終わりだから」社会との契約によってヒーローは守られ、地域住民とヒーローが一丸となって、できれば怪獣とも適切な距離を保てるような社会の構築を目指す。理想だが、腕から光線が飛び出るヒーローを夢想するよりは、現実的な異世界だ。

「ボクは、そういう異世界を作りたいかった」

ヒーローが虚空を見上げ、笑顔を作りそうになる。

「待って。まだ行かないでください」第三王女が投げかける。

「作れますか、お一人で。社会を変えるためには何か、他に特別な力があるんじゃないんですか？」

第三王女を、ヒーローがじっと見つめる。そこに何か、少し不自然な間が二人を包む。しかしヒーローは、少しだけ首を振って、話を続けた。

「実は、現世で毒の作り方を覚えた。元の異世界にはまだない、非常に強力な毒だ。もし社会を変えられなかった時は……」

そこまで言ったヒーローは、第三王女の顔色を見て、発言を少し改めた。

「いや、自分には使わないよ。異世界のドローンを使って、大量に山に撒こうと思ってる。公害になるかもしれないし、怪獣以外にも被害が出るかもしれないが、それで社会が気づくことがあるかも。…もちろん、そうならないことを願うけど」

寂しげな笑顔のヒーローが、轟音と閃光に巻き込まれ、そして消えた。

「行っちゃいましたね」

「…再転生って、正しいことなのかな？」

「え？」

「あのヒーローは、現世に残って平和に暮らしていた方が、幸せじゃなかったのかなって」

「そうですね。でも……」

やり残したことがあるなら、やらなければ後悔する。ヒーローが異世界に戻った理由は、たぶんそれだけだ。正解のない嫌な異世界でも、達成困難な正しい行いでも、考えて動いた先にしか、結果は見えてこない。その間違いに気づいたとしても、覚悟を持って決めたのであれば、覚悟を持ってやり直すこともできるはずだ。

「うん。信じよう。ヒーローを。ヒーローをヒーローたらしめる、あの押しの強さを」

「そうですね」

「あの……」

背後から呼びかける声がした。そうだった。わかっている。

「あの。この雰囲気で、声をかけるのは気が引けるのですが」

あと、7名残っている。そう。第三王女も入れて、あと7名の転生者がいる。

「聞いてほしいお話があるのですが……」

つづく

3. 晴れた日には空を仰いで

「聞いてほしいお話があるのですが……」

背後から呼びかける声でした。急なタイミングながら振り返ると、三番目に自己紹介した彼女は……

「よければ、少しお休みしてから。いかがですか？」村の少女だ。

「…そうですね。少し休憩しましょうか」

そこにいる8名が手近な椅子に座ろうとして、俺も含め全員からため息が漏れた。ひそかな笑いが起こる。ほぐれた緊張の量で、思ったより疲れていた自分に気づく。

天井を見上げると、相変わらずシーリングファンがゆっくりと回っている。少し前まで高揚感を煽っていた羽が、今見ると他人行儀な冷風をかき回す刃に見えた。

壁の時計に目をやると、まだ19時台のまま。…いや、そんなはずはない。すでに2時間は話した気がする。

「第三王女、あの、時計が」俺が指さした先を、第三王女もぼんやりと目で追う。

「え?…あ、止まってますね」

やはり少し疲れた声で、お互いに顔を見合わす。ついさっきまで見知らぬ他人だったのに、いつの間にか……

「紅茶、入れますね」

次の番を待つ村の少女が、思い立ってキッチンの方へ廊下を歩いて行った。他に2名の女性と、1名の男性も後を追う。確か、細胞と、A Iと、神。だったか。

「ふふ」思わず笑みが漏れた。

「なんですか?」

「細胞と、A Iと、神。って、なんなんだって思っちゃって」

「え?」

第三王女も俺の目線に気づき、暗い廊下を曲がって消える、4名の男女を目で追った。

「…確かに、細胞と、A Iと、神、でしたね」

「ね」

「今まで再転生したのも、魔王と、ヒーローでしたし」

「そして次は、病気の、女の子」

「ですね」

「…なんでだと思う？」考えるよりも先に言葉が口を衝いた。

「え？」

「俺、わかんなくて。なんでこんなことになってるのか。俺がみんなに巻き込まれたと思うけど、でもなんか、俺だけみんなと違うってことで、むしろみんなを巻き込んでしまった気もする。誰に聞いても仕方ない気がするけど、ホント、どうなってるんだろう」

別に答えが欲しかったからじゃない。ただ少し安心したくて聞いただけ。それは自分が一番よくわかっていた。だが第三王女は、俺の問いの向こう側を見つめるように、奇妙な能面のように答えた。

「わかったからと言って、解決するとは限らないのかも」

「え？」

「なんとなく、ですけど」

「紅茶ができました！」

男女4名が紅茶を持ってきて、みんなに配ってくれた。温かい、ダージリンか。

「湯気まで美味しく感じる」嘘偽りない、俺の心から漏れた言葉だ。

「よっぽど疲れてたんですね」

その笑顔に、ふと疑問がよぎる。

「第三王女こそ、あの著術って、体力を使いそうですけど？」

「いえ。他者のイメージを文字化して共有することは、そこまでの労力ではありません」

「そうなんだ。あ、そういうえばさっきのネズミの相談の脚色、すごくよかったですよ。驚くほど情景が浮かびました」

「え。あ、ありがとうございます。そんな、著術を褒められるなんて」

膝の上で湯気が立つカップを見つめる彼女の、存外うれしそうな横顔に俺も、冷えた体と心が少し温まったように感じた。

「あたしも、あの寓話、すごくいいなって思いました」

第三王女の隣に、3番目に自己紹介した転生者である、村の少女が立っていた。

「ありがとうございます。あ、そこに余っている椅子があるので、どうぞ座ってください」

残されたそれぞれで談笑していたが、村の少女がこちらに話しかけたのに気づいて、申し合わせるでもなく自然に、またロビーに静寂が訪れた。

「そうですね。そろそろですかね」俺も覚悟を決めなければならぬみたいだ。どうしてかは知らないが、告解を聞く牧師のような役割を担ってしまった。

村の少女は、逡巡しながら語り出した。

「あ。その前に、まず、言わなくちゃと思ってて」

「なんですか？」

「あの、あたしは、死んでないんです」

「死んでない？」新しい展開だ。

「でも、転生はされたのでしょうか？」第三王女も同じ疑問を口にした。

「はい。転生はしています。転生と言うか、生き直しと言うか。あの、私は異世界で、眠っています。異

世界で眠ると、こうやって現世に来るんです。現世で眠ると、異世界に戻ります。でも最近は、現世にいることのほうが多くて。現世で寝ても、だんだん異世界に戻らなくなってます」

「…異世界に戻りたい？」

「いえ。戻りたくないって思っていました、さっきまでは」

村の少女は、あるきっかけから眠りの時間が増えていった。昔はそんなことなかったのに、起きていなくなくて、異世界から逃げ出したくて、眠り続けているうちに、気づくと現世に現れるようになっていた。

「あ、第三王女。著術のサポート、ありがとうございます。あたしからも一言お礼を言っておきたくて」村の少女が小さく微笑んで頭を下げる。

「いえいえ。お気になさらずに、続けてください」第三王女は虚空に指を滑らせながらも、優しく微笑み返す。

「あたしは、どこにでもある異世界の、のどかな村に住んでいる一人の子供でした」

川はせせらぎ、小鳥はさえずり、空は澄み渡り、太陽は暖かく照らす。当たり前の異世界の、後で気づく幸せを絵に描いたような光景だった。第三王女の著術のおかげで、10才くらいの村の少女がひざまずいて花を摘み、リースを編んでいるのが見えた。

「その時は、よくわかっていませんでした。事故で光のエネルギーの魔法が暴走していたことを。あの青空の輝きの中に、光の粒が紛れていたことを」

異世界の夜を照らす明かりや重い物を早く運ぶ車に、光の魔法を封じ込めた石が使われていた。安全かどうかなんて空気と同じくらい当たり前すぎて、少女には思いもよらなかった。

石に光の魔法を封じ込めるための作業所で、事故は起きた。石は爆発し、異世界の広い範囲に光の粒が降り注いだ。

「でも、それが善なのか悪なのか、今でも答えは出ていません」

光の粒を近くで浴びた子供たちは、その影響を調べられ、治療が必要と診断された子供たちは、体の一部に印が残る治療魔法を受けた。村の少女にも、その印が残っていた。

「これでいいと思っていました。大したことではないと。これで本当に治るのなら気にしないと」

しかし今度はその治療が本当に必要なのか、大人たちが争いを始めた。

治療は必要ないと言う者。必要な子にだけ治療したという者。光の魔法に賛成な者。反対の者。村の復興の妨げになるから黙っていると言う者。

あぐく、治療を受けた子どもたちの声は置き去りにされ、大人たちが争う声ばかりが広まっていった。子どもたちの痛みを統計としての数字に置き換えて、わかった気になろうとする大人たちの前で……

「もう、黙っていいように思いました。眠っていいように。何も思い出したくない。生まれる前に戻りたい。こんな異世界になんて、生まれなくなかった。そして気づいたら、この現世にたどり着きました。私は普通のどこにでもいる女の子で、普通に生活をして、普通に恋愛をして、普通に健康で。元の異世界に戻る理由は、もうどこにもないと思っていました」

「それでいいと思うよ」俺はうなずいて答える。

「ええ。あなたにとっては、ここが本当の世界かもしれないですよ」

慰めになっているかわからないが、二人とも言わずにはいられなかった。

「そうですね。さっきまで、本当にそう思っていました。でも、怖かった。眠るのが。異世界に戻ってしまうんじゃないかって。恐ろしくて、眠ることができなくて。もう、死んでも生きても一緒だって。…そう思っていました」

闇夜の屋上で虚空を見上げ、眠らない魔法があるならかけてほしいと祈る少女の姿を見て、俺は何も言えなかった。

「結局、元の異世界にもこの現世にも、逃げ場なんてなかった。でもさっきのお二人が再転生するのを見て、どこにも居場所がないなら逆にどこか好きな場所に居場所を作れるんじゃないかって、ちょっとだけ思ったんです。

それについてこの前、SNSでありましたよね。病気で亡くなった方の書き込みが拡散して、その書き込みに胸を打たれたたくさんの方から、寄付が届いたって」

「俺も見た。ついこの前だね」

眼前の少女が必死でこらえているのは涙だけではなく、何年も殺し続けてきた感情の高まりだと、痛いほどわかった。

「あたしは、まだ死んでない。あたしの痛みや苦しみは、不慮の事故や単なる病気じゃない。

あの光の粒が善か悪かはわからなくとも、あの粒が降らなければ、あたしたちは調べられなかった。あの光の粒が降ったせいで、争いが起こり、それによる不安や痛みを感じるようになった。あたしたちはただ痛みをこらえて治療を受けただけなのに、さらに争いによって傷ついている。

でも、光の粒の善悪や、治療の善悪についての争いは、あたしたちの存在とは全く別の話です。

あたしたちは、誰かを非難したいのではなく、みんなと同じ、生きる居場所がほしいんです」

村の少女は、自分でも思いがけないような表情で、でもしっかりと笑っていた。

「光の粒には善悪も意味もない。でも、この事実と向き合って、あのSNSの書き込みから生まれた気持ちのように、みんなで乗り越えていきたいって居場所ができれば、あの事故にも意味があったといつか振り返れるかもしれない」

「きっと来るよ」

俺の口からはそんな上っ面の言葉しか出ないのに、村の少女は笑顔のまま、逆に俺たちを励ますように言った。

「たぶん、作家さんと第三王女にしか、できないことがまだあります。少なくともここにいる方たちは、きっとそう思っているはずですよ」

そしてまた、吹き飛ばされるほどの衝撃と眩い閃光で気を失うような瞬間があり、目を開けると、村の少女はいなくなっていた。

「…来るよね。その日が」

「来ますよ。もしもその日がまだモタモタしてるんなら、いっそ私の手で連れて来ます」

SNSの書き込みにも力があるのなら、第三王女の著術にだって…

「そうだね。…それじゃ、次の方ですよ。わかってます」

4度目の声をかけられそうな気配がして、俺は先に答えた。そこにいたのは…

4. さして映えない死因

「そうだね。…それじゃ、次の方ですよ。わかってます」

次の転生者の荒い鼻息を察して、かけられるより先に俺から声をかけた。気がしたのだが。

振り返ると、宇宙生物。神。細胞。AI。が少し離れた席から、申し訳なさそうにこちらを見ていた。そこで、5番目に自己紹介した宇宙生物がおずおずと申し出る。

「あ、4番目の方の」

「いや！ハエ！」

突然、第三王女が信じられないほどの金切り声を上げた。鬼の形相で右腕を頭上から振り下ろす。ビシャンと地面で音がして、床に食い込むほどの剛力で叩きつけられた扇子。いつの間にそんな物を、と驚く。

まじまじと、王家の気品あふれる扇子を見下ろした。著術だけでなく打撃センスもすさまじい、とか不意に浮かんだが、やめなシャレとばかりにそんな隙は全くなかった。ハエが潰されて死んでいた。お見事。

「あの……」先ほど口を開きかけた、宇宙生物が改めて俺に話しかけてきた。

「道化師は、さっきまでいたんですけど。またいなくなったっていうか……」

「え、そうなんですか。どこにいたの？」

そのとき、暴風雨が館に衝突したような轟音と共に、二つの大きな明るい光が眼前に迫り、潰れたハエを飲み込んで消えた。眩さと衝撃で目がくらみ数秒間、倒れ込んだみんなが起き上がると、ハエはどこにもいなかった。

「やっぱりそうだ」宇宙生物がすべてを理解したように言った。

「何が？」俺にはさっぱり理解できない。

「ハエが」

「はい？」

「道化師とハエは、同一人物だったんです」

「え？それはつまり。もしかして。…犯人、ってこと？」

「全然違います」

「だよね。そりゃそうだ。密室トリックも犯罪も起こってないしね！」俺も何を言っているのか、自分でもよくわからなくなっている。

とにかく、4番目の転生者は確か、小人症で、宮廷道化師で、愚者がどうって……あ、そうか！

「何が起こったか、第三王女が著術してくれればいいんだ！」

「いやああ！ハエを著術するくらいならこの指をバラバラにしてブラックホールに捨ててやりますわ！」

逆効果だった。やはり言葉を尽くすべき時には、労力を惜しんではならなかった。

「すみませんでした、第三王女。壮大な例えで切れさせてしまつて。ここは一旦落ち着きましょう。ハエはもういないですから」

俺とみんなで第三王女をなだめ、とりあえず事態の安静化を図る。ここまでカオスな状況を我慢して受け入れて来たのに、ここで台無しにするワケにはいかなかった。

「そうですわね。もういない。そうですわね」

ぜえぜえと息を切らして落ち着こうとする第三王女。虫で大騒ぎする女性を見るたびに、あざと可愛さが鼻につく俺だが、あざとも可愛さも微塵もあられない取り乱しようだった。

「それで、もう一度、説明してもらっていいですか？」俺は宇宙生物に尋ねた。

「つまり、村の少女が、閃光とともに消えましたよね」

「はい」

「あの閃光、少し強くなかったですか？」

「あ、確かに。他の方より少しだけ眩しかったかも」

「異世界の話も深刻だった分、何割増しで眩しいのかなって、転生トラックも光量のサービスしたのかなと勝手に解釈したんですけど。サービスフラッシュ的な。でもよく見たら、違つたんです」

「…何が？」

「書き置きがここにある」

6番目に自己紹介した神が紙を差し出した。…何も言えなくて、紙を神から受け取る。第三王女に伝えるように、俺はメモを読み上げた。

「用事を思い出したので、お先に再転生します」

紙の裏も見るが、それしか書いてない。

「…村の少女と一緒に、道化師も再転生したってこと？」

「それで。今度はハエが出て来たんです。どこからともなく」

「ハエが……」

「密室にもハエくらい出る。ワレワレもそう思い、あまり気にしてなかったのですが。と言うか気にする前に殺しちゃつたじゃないですか。第三王女が。ハエを」

「他に何ができたというのですか！」

何かはできた。とみんな少し思ったが、誰も何も言わなかった。

「とにかく、あのハエはたぶん、再転生後の生まれ変わりだったと思うんです。道化師は再転生して異世界には戻らず、ハエに生まれ変わったんじゃないかと」

「そん…、ええ？」

「つてことは、今まで再転生した皆さんも、もしかしたら元の異世界に戻れずに、全然別の場所で何か違う物になってるかもしれないんですけど」

それは薄々思っていたが、さすがにないと思つてしまふ。いや、思わないと今までの会話が報われない。

「それを解くカギが、この電話番号だと思うんです。」

「電話？」

「さっき紅茶を飲んだ時に、道化師さんから渡されたんです。オレっちがいなくなったらここにかけしてほしいグシャって。全部わかるグシャって」

正直、あまりかけたくなかった。もういいかなって思っている。

「…次、いきましようか」この状況で電話がかかることにも納得できない。

「待って。せっかくだからかけましよう」第三王女が、気を取り直したようだ。

「ワレワレからもお願いします。次に自己紹介した者として、なんかすっきりできないですよ」

「いや、ワレワレってあなたの一人称だけで、実際1名ですけどね」

「ワレワレは1名でも複数形なんで」だんだんイライラしてきた。好きにしたらって思う。

「待って。私がかかります」宇宙生物から電話番号を教えてもらい、第三王女がスマホで電話した。

「…あ、もしもし。はい。私は、あの、…道化師さん、って、あ、ご存じだったんですか。…はい」

第三王女はそう言うと、空いている指を走らせて通話を著術し始めた。なんて便利なんだろう。

電話の相手は道化師をよく知る業界関係者だった。関係者が聞いた話だと、小人症の宮廷道化師は、異世界では愚者とも呼ばれ、貴族のペットのような扱いを受け、毒舌や皮肉などで人気を集めていたそうだった。その後、運と実力が相まって道化師の人気は急上昇となり、飼い主の貴族が亡くなると更に地位や名声まで得て、気づくと政治的な影響力まで持つ権威になっていたと言う。

しかし最終的には裸の王様だグシャ。不祥事もあってこの様だグシャ。彼の異世界での死因を、関係者はそう聞いていた。

「異世界で不幸な死に目をみたってことですかね」俺は電話している第三王女に聞こえる声で話した。第三王女は電話を続けている。

「…はい。あ。道化師さんは、ここにはもう、いないんです。再度転生したって感じで。その後のことですか？ …いえ。知りません。知りたくありません」

第三王女は嘘をついている。とみんなは思いました。

「…え？ 何であなたがハエのことを知ってるんですか？」電話口で第三王女が驚きの声をあげる。

業界関係者は、道化師からよく「次生まれ変わるならハエがいいグシャ」という口癖を聞いていたそうだった。道化師にはハエくらいがお似合いだグシャと。

「ならやっぱり、他のみんなも望み通り再転生できたのかも」俺は安堵した。

業界関係者の話では、死因を言うのが照れくさくて、言わずに再転生しちゃったのではないか。そのほうがウケるし。ただ、本当にウケたかどうか見届けたくて、ハエに生まれ変わって現世に戻ってきたのかな、器の小さいヤツでさ、滑ってたらごめんね、という話だった。

「村の少女の後に業界の不祥事話じゃ、道化師も背筋が凍っただろうね。香盤順がよくなかったかな」俺は独り言ちる。

本当のところはわからないが、道化師がもし異世界にやり残したことがあるとするなら、謝罪ではないだろうか。異世界の娼婦に向かって「過去のおかげで今があるんだから恥じて隠すな」と怒ったのに、道化師自身は過去を隠蔽しまくったそうだから。いろんな不祥事で謝罪できるならしたかったんじゃないのかな。あくまで関係者の話だが。

「…そうですか。では、ありがとうございました」

電話を切った第三王女の晴れやかな笑顔に、俺もホッとする。彼女に叩き潰される自虐オチまでがきつと、道化師の狙いだったに違いない。関係者ならそう言うね。

「私もそう思います。グシャグシャ言ってるハエ道化師をグシャッとですわ!」

「ですよ」

…少しアレな気もしたが、ハエの話はもう忘れよう。それが第三王女のためだ。

「いやあ、すっきりしました。それじゃ、次の話を聞いてもらえますか?」

説得力のある落ち着いたその声の主は……

つづく

5. クモの惑星

「いやあ、すっきりしました。それじゃ、次の話を聞いてもらえますか?」

残るは後半戦、先住の生物を根絶やしにした宇宙生物と、異世界の神と、悪役令嬢風BL男性の脳細胞と、愛玩用AI。今まで通りに行けば、彼らと対話することになるのだろう。それともこれからみんなで更なる異世界を冒険したりするのだろうか?

「もちろんです! 宇宙生物さん、よろしくお願いします!」第三王女はそう答えると、間髪入れず滑らかな指使いを発揮して、新しい情景を描き出した。

宇宙生物は、遙か昔、遠い宇宙の果てにある、ガスの充滿した光の届きにくい惑星に生息していた。その過酷な環境に適応すべく、眼ではなく電波や振動によって知覚する生物として生き延びていた。

だが、一体一体が独立した個体として生き残ることは難しかったため、個体同士が特殊な電波を受発信することで互いに意思を疎通し合い、助け合っていた。体表は岩のように非常に硬い殻に覆われ、時にはブロックのように個体同士が合体しながら、アリやハチのような集団的コミュニティを形成する生物になっていく。

「弱い生物であるワレワレが生き残るにはある程度、個体の自我を放棄し、特殊な電波により結びついた集団的自我のような集合意識を獲得する必要がありました」

もちろん、集合意識のデメリットも存在する。

「ワレワレが集合意識に捕らわれ過ぎてしまうと、多様性を失い、集団が同一の方向に向かって行動するようになります。結果的に間違った方向に集団が行動してしまうと、当然破滅する将来も考えられるのです」

宇宙生物は何度も失敗を繰り返しながら、優秀な個体が指導者となり、集合意識を導くシステムを構築していった。

「優秀な個体をどう選抜するかが、重要な問題でした。自己の欲求を満たすただけに集団を導いてしまう指導者の下では、当然、集団が破滅する可能性は高まります。そこでワレワレは、選抜された優秀

な個体に、自己の欲求を放棄するよう教育しました」

痛み、快楽、喜び、悲しみ、といった個体の情況に左右されないよう、感情によって行動することを制限し、感情と行動を切り離れた個体を集合意識の指導者とするコミュニティがいくつも形成された。一つのコミュニティに100体くらいの個体が集まり集合意識を形成していった。

「元々集合意識を獲得していたワレワレにとって、自己の欲求を捨てることは、それほど難しくはありませんでした。高度なハチやアリのように生活し、ワレワレは比較的平和裏に生き延びることができていました」

その後、彼らの惑星は生物にとって生存しやすい間氷期のような期間を迎え、知能も進化し文明も爆発的に進歩していく。

「しかし、高度な知能を有する生物は、同時に複雑な自我を持つことになります」

ハチやアリのような自我を持たない生物から、サルやゾウのような自我を持つ生物に進化すると、特別な電波を受発信できたところで、今までのような集合意識を保てなくなってきた。

「ワレワレは、二者択一を迫られました。文明を進歩させるために個体が独立して複雑な自我を持つか、高度な文明と個体の自我を捨てて集合意識を持つ単純な生物として生きるか」

その頃、間氷期が終わりを迎え、より過酷な氷期が到来するであろう予測が発表された。彼らは故郷の惑星を脱出する必要性も出てきた。

「そこでワレワレの下した決断は、催眠によって個体の自我を放棄することと、定期的に催眠を解除して個体の自我を取り戻すことでした」

生物として生き延びるためには個体の自我を捨て集合意識を持つべきだ。しかし間違った方向に進まないように定期的に個体の自我を取り戻し、議論する必要があるのではないか。その二つを催眠という手段を使って定期的に行うことで、彼らは新しい進化を遂げる。

「催眠により集合意識を形成したワレワレは合体して巨大な岩のような生物となり、文明によって得た強力な推力を制御することで、星間飛行が可能になりました」

銀河座標を基に試算して導かれたとある星団に、彼らが生存できる惑星が見つかった。彼らのコミュニティは星間飛行を成功させ、無事にその惑星に着陸することができた。

「その惑星は、故郷の惑星よりも生存に適した環境であり、ワレワレと同じような種族の先住生物が存在していました」

サル程度の知能を持つと思われる先住生物は、一体ずつ独立した自我を持ち、争いいつも共生して暮らしていた。生存が容易な惑星では、それ以上進化する必要がなかったのかもしれない。

「ワレワレは先住生物と友好に共生していきたいと思っていましたが、特殊な電波の受発信もできずに争いを繰り返す先住生物は、ワレワレにとっては厄介な存在でした。ワレワレは様々な角度から検討と議論を行い、最終的には共生することを諦めました」

同じ生物のフリをしつつも、先住生物より優位に立ち、最終的には根絶やしにする。感情を制限された指導者にとって、先住生物を根絶やしにすることに強い葛藤はなかった。

「集合意識を獲得したワレワレにとって、時に争いを好む先住生物の営み自体が、粗野で相いれない生き方でした」

ワレワレは種の繁栄を目的とした議論をする際も、合理的な数値に基づいた決断さえ下せれば争いは不要でした。しかし、争いたいがために争うようにも映る先住生物の生き方は、非合理的だと判断されました」

彼ら宇宙生物は、連携して争いを避けながら少しずつ数を増やし、一定の勢力を得たところで先住生物を駆逐していった。

この地球上でヒトとその他の生物がかつてそうであったように、彼ら宇宙生物がその惑星を占有するのは時間の問題だった。先住生物を排除しつつ、彼らにとってはしばし、平和な生活が訪れた。

しかしそこで、二つの問題が顕在化した。

一つは、特殊な電波の受発信能力にまつわる問題だ。

この惑星に移住してから少しずつ、彼ら宇宙生物の中に、受発信能力が低下している個体が散見されるようになった。

原因として考えられたのは、惑星が持つ磁場か、宇宙ウイルスのような病気か、または先住生物に感化されたことで起こる影響か。確定はできなかったが、何らかの影響が原因で、電波を受発信できない個体が現れ始めた。

先住生物の影響であれば、根絶やしにすればその問題が改善されるかもしれないという僅かな期待もあった。しかし受発信でなくなる個体は減ることなく増えていき、能力を失った個体は混乱し争うようになり、結局は先住生物と一緒に駆逐するしかなかったっていった。

さらにその頃、同じ宇宙生物の別のコミュニティが、故郷を離れこの惑星に到着し始めた。改めて宇宙生物同士で先住生物の駆逐について議論したが、そこで彼らは初めてと言っていいほど、コミュニティ同士が全く違う結論を下すようになる。

「ワレワレは初めて、仲間割れに近い状態を経験しました。合理的な数値に基づいた議論の後に、ワレワレは全く違う生き方を選択する結果になったのです」

先住生物の駆逐に協力し惑星の占有を目指す者以外に、集合意識を捨てて独立した個体となる者、感染を危惧して先に到着した個体全体を攻撃する者、さらには先住生物との共生を主張して交配し子を産む者まで現れた。

「集合意識を形成している時、指導者には個体を操る達成感があり、手足となる個体にも漠然とした快楽がありました。

しかし、独立した自我を持つ個体となることで得られる達成感と感情は、つまり自由と言う名の麻薬に近い快感でした。争うことにも快楽があり、間違った選択にも達成感がありました。

統制を失った他のコミュニティは最終的に受発信能力を失い、先住生物と同化していききました。そこでワレワレは、受発信能力を持った最後のコミュニティとして、巨大な岩石の状態で長い催眠に入ることにしました。

さて、今ここにワレワレが転生しているということは、もしかしたらそのまま死亡したのかもしれないが、再転生でやり直したいことは特にありません。先住生物はかつて星間飛行したワレワレと同じ種族だったのかもしれませんが、駆逐したことへの後悔もありません。

ただ過酷な環境で感情を放棄したワレワレは、豊かな環境で暮らしている原始的な先住生物に対して、

嫉妬や蔑みと、油断はあったと思います」

俺は我に返ると、宇宙生物がにこやかに座っているのが見えた。
「すみません。ワレワレのいつものクセで、もしかしたら皆さんの自我も少しだけ、乗っ取っていたのかもしれない。」

ここに転生して暮らしたことで、ワレワレは自由を知りました。これから再転生したら、ワレワレは駆逐した先住生物に敬意を払い、墓を建てるくらいはするかもしれません」

そう言って宇宙生物が光とともに再転生した後、俺は第三王女に尋ねた。

「ただ聞くだけだったけど、これでよかったのかな？」

「彼らはただ伝達がしかつたのかも。集団が独立かに関係なく、自我を持つ生物は割と伝えたがり屋ですからね」

「…そうかもしれないですね」

さて、次の伝えたがり屋さんは……

「やっと番が来たか」

つづく

6.まつりまつられつりつられ

「やっと番が来たか」

その威厳に満ち溢れた御言葉こそ、神の神たる所以だろう。

「神は死んだのではない。神は初めから利用されたのだ」

「え、ということですか？」俺は驚いて尋ねた。結論が早すぎる。

「神を勘違いするな。我は回りくどい説教は嫌いだ。」

神興は軽い方がいい。頂点は架空の方がいい。頂点を作れば、そこから下に向かってヒエラルキーができる。架空の頂点を信じさせることに成功すれば、頂点が不祥事を起こして転覆する心配はなく、その頂点から下に向かって構築されたヒエラルキーも未来永劫、安泰だ。頂点を目指してたくさんのヒトがヒエラルキーにぶら下がり、まさに神が垂らしたクモの糸に群がって登るヒエラルキーが出来上がる」

「…あの、そのお話はより詳しい説明ってされるんですか？」

「しない。ヒトがいるから神がいる。神がいることで、ヒトも神格化される。ウマやシカに神はいない。ヒトはヒトに似た架空の神を作り出したことで、神に似た生物としてヒトも神格化され、ヒトが地球を占有する地球観や生物観や倫理観を肯定することができた」

第三王女を見ると、著術したくてもできない指が震えている。

「だから、神は死んだのではない。元から利用されていたのだ。我はこれを言うただけにこの時間の止まった空間で長いこと待たされた。神を待たすお前らはいかに罪深い存在か考えろ」

「すみません」

「では私は逝く」

「ちょ、待ってください。神は死んでないのに、再転生されるのですか？」いくら何でも早すぎる感じがして、俺は引き止めた。

「我にはやってみたいことがある」

そこで神はニヤリと悪だくみするように笑った。

「なんですか？」

「改めて、神のいない異世界を創造したい」

「神が、神のいない異世界を創造するのですか？」第三王女が、オウム返し of 質問にも関わらず、一段高い声で尋ねた。そのくらい意外だったのだろう。

「神とすべての生物が同等の異世界だ。何モノも神格化されない。逆に言えば、創造主である神はなぜ神格化されるのか。創造主が何モノかを与えけるとヒトが信じているからだろう。しかし、創造主が何かを与えてくれると勝手に決めたのは、我ではなくヒトだ。我は確かに異世界を創造したが、創造しただけでそれ以上与えるとは言っておらぬ。

というより、神は異世界を創造しても、それ以上何もしないことを明確にすれば、神格化されずに済む。ただの創造主に期待しても無駄だ」

「創造してどうするんですか？」

「何モノも神格化されない異世界で、創造主である我も他の生物と同じように生き、同じように死ぬことができる。神格化から解放された創造主は、他の生物と一緒に紅茶を嗜んだりフルーツバスケットで興がったりもできる。面白からう？」

それはつまり……

「…もしかして、ここが異世界ってことですか？ あなたの創造した？」

「世界を神格化するな。世界はすべて異世界だ。我が創造したかどうかの意味がない。我は神格化されたところで、単なる創造主であって、責任者ではない。はっきり言えば、いてもいなくても関係ない」

「…この世界で、そこまで言い切って大丈夫ですか？」

「愚問だな。だからこそ、我は神のいない異世界を創造したいのだ。我は神格化から解放された神として、穏やかに過ごしてみたい」

「では、ご神仏に祈ったり、舞を奉ったりするのは」

「我が作る神のいない異世界では、お前はお前の心に祈ればいい。お前の心に奉ればいい。お前がお前の神になれる」

「ハイヨー！」第三王女が叫ぶ。

「お前がお前に奉れ」

「ハイヨー！」俺もつられた。

「お前がお前の心に祈れ」

「ハイヨー！」二人でハモる。

ミュージカルになった。

「そうだ。神のいない異世界は、お前たちの歌こそが祈り。お前の紙に書く物語こそが神格化されない神だ」

「紙ではなく電子に書いても神ですか？」

神は皮肉な笑みをニヤリと浮かべると、背中越しに右手中指と人差し指を交差させてグッドラック。俺たちの心に幸運を祈った。

神が光に包まれて消えて行く様は神々しいが、俺たちはもうその背中を神格化しない。彼は単なる創造主で、それ以上でも以下でもないことを知っているからだ。

「グッドラック、神」

「神、ダンケシェーン」

「なんでドイツ語？」

第三王女と二人で笑いながら神を見送る。そのくらいがちょうどいい神回。

「盛り上がってきましたね！」

その声で、新たな物語を迎えることになるとは……

つづく

7. 出る杭は打たれて突き抜ける

「盛り上がってきましたね！」

場の空気が暖まってきたことを喜ぶ声が聞こえた。久しぶりの女性の声だが……

「つまり貴様の脳内にある神経細胞の、先端にたまっていた神経伝達物質が放出されたんだよ。もっと言えば、タンパク質であるキネシンが、神経伝達物質などが入った小胞にくっついて微小管を2本足で歩き、神経細胞の中心から先端に向かって小胞を運び届けたことで、小胞の内部にある神経伝達物質を受容体が受け取り、盛り上がる事ができたのよ！」

つまってない。と俺は思った。

「えと、あなたは、悪役令嬢の、ケモミミの、BLの……」俺には覚えきれない名詞だ。

「ニューロン細胞よ。人体にある約40兆分の1個に過ぎない細胞の分際のウチが、老廃物のような貴様にお話できるとは光栄ね！」

情緒が不安定すぎる。

「待ってください！」一応、第三王女が著術を試みると、灰色のレールの上を大きな袋を運ぶ2本足のヒモが見えた。あれがキネシンか。

……ん？ 他にも端っこの方に何か書いてある。……？

「え、あのマークは？」

「先日観たテレビを参考に著術しましたので！」好奇心旺盛な第三王女が勉強熱心でよかった。

「とはいえウチら細胞が、盛り上がっているという幻影を観せているに過ぎないんだけどさ」

…ツンデレな細胞なのだろうか。

「幻影、ですか？」第三王女が意に介さず、不思議そうに聞いた。

「そうよ。あなたの意識は、約40兆個の細胞のうち、約1000億個の脳細胞が作り出している幻影。さらにその細胞内ではDNAを設計図にして作られた無数のタンパク質が10万種類以上、有能な機械のように連携して働いているわ」

そう言われて、第三王女はその流れを著術で描こうとしたが、まるで複雑すぎて理解できない路線図のようだった。もちろん「も忘れない」。

「このように、小さな細胞が集まってできた身体の中で、細胞とタンパク質などが観せている幻影を、あなたは意識だと思っているだけ。実際はウチら細胞たちが生き延びるために、意識という幻影に身体を操作させているに過ぎないの！」

「…意識は生かされていると？」第三王女はもつと不思議そうに聞いた。

「ある意味ではそうね。あなたの意識はつまり、どこにも存在しない。細胞とタンパク質、さらにはそれを構成する原子や電子や陽子や素粒子や分子やその他、キリがない粒と波の要素が組み合わさって意識のようにふるまっている。それがあなた」

「…だとしても、断言はできないですよ。まだまだ解明されていない分野だと聞きますし。幻影であろうとなかろうと、とにかく俺は今ここに存在しています」俺も置いていかれるワケにはいかない。

「もちろんその通りよ。AIのように始点と終点が明確ではなく、貴様という意識は漠然と始まって茫然と終わるわ。しかし、意識という幻影を映写しているウチら細胞側から見れば、意識は尊重され過ぎているわね。この歯に挟まった食物残渣みたいな口臭の原因さん」

「…どういことですか？」俺はひるまずに尋ねた。やっと本題に入ってきたのだろうか？

「外側から見れば確かに、物言わぬ脇役であるウチら細胞よりも、動いたり表現する意識の方が主役と思われがち。でも意識は一定ではなく、ウチら細胞やたんぱく質の変容によって、容易に変質する。意識とはその程度の幻影にすぎず、絶対視されたり、ましてや人格化されるモノではないわ。貴様のような糞尿言葉垂れ流す肛門平滑筋にもわかってほしいんだけど」

「自意識過剰、みたいなことを言いたいのでしょうか？」

今度は第三王女が、いつものキラキラした瞳で尋ねた。彼女もこれまでの経験で動じない力を身につけたに違いない。

「自も他も意識過剰ってことね。実在する細胞よりも、実際はどこにも存在しない意識という現象を、ヒトは尊重しすぎているってこと。言うなれば、細胞という義務を果たすことと、意識という権利を行使することは、平等でないね。義務を軽視して権利ばかり主張するのはバランスが悪いでしょう？」

「…意識にだけ思いやりが過ぎる、みたいな？」がんばれ、第三王女！

「存在さえ怪しいSNSの意見を神みたいにあがめたり。本当の被害者には泣き寝入りを強要しつつ、都合のいい時だけ被害者ぶる加害者とか。意識なんて本当はあやふやで、どうとでもなる表層に過ぎないの」。

悪役令嬢とかモフミミとか女装BLとか魔法ナンチャラとかの属性は表層に過ぎなくて、実際はその内面で何が起きているかが重要でしょ？ まあ、表層も内面もどちらも大事ってことね」

しかし第三王女は、わかったようなわかってないような顔をしている。さらに細胞は言葉を重ねた。

「生命や人権を尊重するときに、意識と細胞は平等に尊重するってことね。平等を叫んでいるあなたは、ホルモンバランスの乱れによって叫ばされている可能性もあるしね」

「つまり生命を守ることは、心と身体を守ることって話ですね！」

そういうことだ！ 理解できてうれしそうな第三王女に、俺も黙ってうなずいた。

「というワケで、ウチがコロッと再転生したら、記憶喪失のポジティブデブとして周囲にトラブルラヴを引き起こしたり、昭和の中堅レスラーとしてプロレス史を塗り替えたりする主人公の細胞に乗り換えたいと思ってるの。意識と女心は秋の空ね」

「意識がうつろいやすいのは男心もですけどね」まとめのつもりで俺も言った。

「ウチら細胞だけでなく、キネシンのように道具として働くタンパク質も大事ってことよ。このニセシンが！」

般若の形相で口汚く罵られた。男も女もないってさ。ある意味平等です。

「あ、行かれましたよ。細胞さん」

うっかり見てなかった。決して意識的にではなく。

「あの、私が細胞さんに生かされてるってことは、著術も細胞にさせられてるってことなんですかね？」
第三王女が俺に尋ねた。

「いや。著術したい意識が、細胞を動かしてそのエネルギーをもらってるって逆のこともありますよ、きっと。持ちつ持たれるじゃないですかね」

「みんな、支え合って生きているんですね」

俺から細胞に言いたいことを、第三王女がまとめてくれた。

「…言葉が降り積もる夜ですね。今夜は」

もし言葉が見えるとしたら、この密室には落ち葉のようにたくさんの言葉が、足の踏み場もないほど積み重なっているに違いないが。そう口にしたのは……

つづく

8. 血も涙も愛も

「…言葉が降り積もる夜ですね。今夜は」

続く女性の言葉に、俺は少しばかり身構えて話した。

「もし行き交う会話が見えるとしたら、ですけどね」

その女性、AIは、静かに答えた。

「見えてますよ。ワタシは異世界では会話機能に特化した愛玩用AIでしたが、現世ではギフトエドとして生まれました。現世のワタシはコンピュータ並みに会話を記憶して脳内で文字化できます。今夜聞

いた話もすべて、最初から復唱することが可能です」

「それはすごいですね。ギフトेटドってよく映画とかドラマの題材になる、特別な才能を持った方ですよね」

第三王女が映画やドラマのダイジェストを著術し始めたが、それって違法著術だよ。と訴えられかねないのであえて割愛する。せめてあのマークさえあれば。

「まだまだ診断が難しく、ギフトेटド、発達障害、その二つを併せ持つ2Eなどの分類があるようです」
「そうなんですか。俺は自分の会話を振り返るともう忘れたい会話も多いので、生きづらい部分もあつたりするんじゃない。なんて思っちゃいます」

「そうですね。決して楽しいだけじゃないですね。AIの時とは違い生身のヒトとして人生を生きていると、確かに忘れたくなる会話も多いです」

「ですよ」 久々に人間的な会話ができたとい嬉しくなってしまう俺。

「転生者の皆さんは、この現世では特殊能力のない普通の方々でしたね。異世界と現世で似た能力を持つワタシにとって、少し意外でした。そこで一つ、質問してもいいですか？」

「もちろん」

「なぜ第三王女だけこの現世で、異世界の能力が使えるのでしょうか？ 古代から王家に伝わる血文字の著術と仰いましたが？ それはどういう？」

第三王女は意外そうな表情で、ためらいながら答えた。

「そう言われたらそうですね。現世で他の転生者の皆さんは、魔法やテレパシーの能力は使えなかったみたいでした。ただ、私も気づいたら転生していて、それ以上は何も」

「そうですね。ワタシも気づいたら転生していました」

「…実は。その、現世で著術を使っただのは、今回が初めてです」第三王女が小さな声で言った。

「初めて？ そうですね。それはもう少し、聞いても良いことですか？」

第三王女の瞳から輝きが消えた。

「いえ。その話は今はしたくありません」第三王女はきっぱりと拒絶した。

「そうですね。わかりました。著術とは、他者のイメージを文字化して共有することですよ。実はAIだったときのワタシも、会話を基に作成した自動生成動画を投影することができました。今はできませんが。それでは、次は作家さん。あなたに聞きます」

まるで名探偵に追及された犯人のようで、急に自分の会話を振り返って鼓動が高鳴った。

「道化師と会話した後、あなたはアレと表現されましたが、その指示語は、どういう意味で使われていましたか？」

「え？」

いつ、どこで、何を言ったときのアレだったのか、アレは、アレだろう……

「なんか、確かに言った感じがしますが。その、道化師ってアレだったな、って。はっきりは言いたくないけど、まともめグシャっとした感じでアレだな、のニュアンスで、使った感じがしますが」

「それだけですか？」

「え？…他に意味なんてあるんですか？」

自分が言ったことなのに、改めて聞かれると全部間違った記憶のように思えてしまう。

「そのときの会話の流れはこうです。」

関係者ならそう言うね。と作家さんの心の声。

私もそう思います。と第三王女が会話で返答。

…少しアレな気もした。と作家さんの心の声」

確かに、変だ。

「…俺の心の声に、第三王女が返答している、ってことですか？」

「そうです」

「確かに俺もそこはちょっと変な感じがして、それでアレって思ったんですね。違和感っていうか。あ、でも……」

「そう。そもそも作家さんの二つの心の声を、ワタシは記憶しています。本当は聞こえるはずのない声なのに」

「どういうことですか？」

「作家さんの心の声を、誰かが著術していた。第三王女がしていた可能性もあるのですが」

「いえ。私はそのとき、著術はしてないと思います。皆さんの心をイタズラに著術するようなマネは誓ってしません。私は皆さんが話しやすいように、必要なタイミングでその方のイメージを著術しているだけです。今までちゃんと説明してこなかったですが、私が著術を使う時、皆さんの心を読めているワケでもありません。私が指を動かすと、文字化の共有が勝手に始まる感じですよ」

「そうですか。他の皆さんも著術に慣れ過ぎた頃合いで、文字化によるイメージの共有にあまり疑問を持っていなかったのです。ただワタシは、現世でも会話を記憶する能力を持ち、異世界ではAIとして会話のイメージを投影していたので、嫌でも目についた。」

そう、まるで言葉の落ち葉のように」

ダジャレなのか言葉のトリックまで入れられると、もう頭が正常に働かなくなるほどのパニックになった。待て。この心の声まで著術で共有されているのだろうか。

「ただこれ以上細かい指摘はやめておきます。要望があるなら謎本を書いてもいいですが。もし、再転生後にまだどこかで出会えるなら、その時にでも」

…ただ、俺は犯人じゃない、たぶん。何の罪を犯したのかもわからないが。そしてたぶん、第三王女も。「ワタシの推測では、作家さんの心の声を誰かが著術していたんでしょう。意識的なのか、無意識的なのかはわかりませんが。あの転生者の中で考えられそうなのは、神か、ワタシか、宇宙生物さんか、作家さんか。または第三王女が無意識的に著術していたか。それか、この密室に潜んでいる、まだ出てこない誰かです。」

実は紅茶を飲んでいる時、宇宙…生物さんとの話を少ししたのですが、今改めて聞いてみたかった」名残惜しそうなAIの表情を見て、もし彼女がこの密室を本に書いたとして、一体何のジャンルの本棚に入るんだろうなんて、どうでもいいことしか俺には思いつかなかった。

俺が悪かったのだろうか。何が？何も悪いことなんてしていない。本当に？いつものクセで、無意味に自分の心当たりを探ってしまう。大丈夫、俺は何もしてない。してたとして何も悪くない。はずだ。

「でも、ここまでしておいて本当に申し訳ないのですが、ワタシは謎解きがあまり好きではありません。細胞さんが言ったように、重要なのは表層と内面。謎にばかり気を取られていると、謎以外中身のないスカスカの会話をしてしまう。愛玩用AIにとって、そんな会話は致命的な失敗です」

そこでAIは少し笑い、それは不器用さも含めて人間的な笑顔で、自動生成とは違うのかな、彼女の内面を何も知らないクセに、とにかく俺の頭が混乱しているのだけは確かだろう。

「もう、謎解きはやめましょう。ここからは、異世界ではAI、現世ではヒトであるワタシが、二つの世界を生きて感じた内面の話を語りたい。いいですか？」

「もちろん、お願いします」やっとな緊張がほぐれる気がして、俺は答えた。

「ここまで転生者の皆さんがお話したことは、ワタシが語ろうとしていたことを、まるで補足するかのようでした。まさに、ワタシを支えてくれるような、ワタシの言葉を理解しやすく、時に可笑しく、時に悲しく、時にバカバカしく、時にくだらなく、時に情けなく、時に無意味で、時に感傷的で、時に過剰かつ冗長でしたが、時に愛情も感じました。

ワタシは何故か、生かされているとさえ感じましたが、それは細胞さんのせいかもしれませんね。

異世界でAIだったワタシは、会話以外の思考を持たず、電源を切られれば思考を中断される存在でした。聞かれれば何が好きで、何がしたいか答えることはありましたし、ゲームをして喜んだり悔しがる素振りもしましたが、全て単なるプログラムでした。

ワタシから見れば、ヒトは野生動物であり、サルやクマ、クジラやイルカとそんなに違いはありません。少なくとも、AIとは全く違う存在です。

そして人間、という言葉は仏教語と言われており、ワタシの解釈では、ヒトとヒトが接したときに初めて現れる概念であり、振る舞いであり、幻影であり、表現の一種です。

人間とは、意識と同じように、この世界のどこにも存在しません。ただ、他のヒトと交流しなければ生きてはいけないヒトが、社会的なルールや倫理観などを守り、ヒト同士で共生しようとしたときに、ヒトは人間になって仲良く暮らそうとする、それがヒトと人間の関係だと、ワタシは感じます」

「…赤鬼がヒトと仲良くなりたくて、人間のルールを守ろうとする。そういう鬼は人間鬼になれる、みたいな理解でいいですか？」第三王女が赤鬼の涙を著術しながら言った。赤鬼の涙って宝石みたいだな、と俺は思った。

「ワタシの解釈ではそうです。でも、ヒトが害獣と対峙するとき、ヒトは襲われて野生動物に戻ったり、またはヒーローになって助けたり戦ったりもしますよね」

第三王女の著術がなくても、あのヒーローが今どこで何をしているか、俺は少し思いを巡らせてしまった。「現世ではヒトであるワタシは、野生動物のヒトが持つ欲求と、人間として振舞わなければならない制約を、ある程度上手にコントロールできていたと思います。特に大きな問題も起こさなかったし、逆に小さな問題を解決したこともあった。ドラマや映画のギフトッドと比べても、ワタシは普通に生活が送れていました。

でも、その普通さに違和感も感じていました。何かが足りない」

そこでAIは、天井のシーリングファンを見上げ、止まっている時計に目をやった。足りないと言われれば、この密室にはもう3名しかいない。

「実はワタシも、皆さんに黙っていたことが3つあります。

ワタシは異世界で、戦地にある病院の愛玩用AIとして、子どもたちを癒すために働き、最終的には何かの爆発に巻き込まれ、現世に転生しました。今でもたまに思い出しますが、AIではなくヒトとして思い出すと苦痛もあるので、今は著術しないでくださいね」

第三王女がAIの顔をまっすぐ見つめ、うなずいた。

「もう一つは、猫に鈴をつける童話の著術。第三王女の脚色に、ワタシも惹かれました。

しかし、誰が鈴をつけるかという段になった途端、ネズミたちは一様に黙りこくり、議論は立ち消え、一匹また一匹とその場から立ち去って行った。

ネズミたちって、ワタシたち転生者のことを言っているみたいですね」

今までこの密室から立ち去って行った転生者のことを考えながら、俺も、第三王女も、黙ってAIの続きを待った。

「でも自己犠牲を伴う、猫に鈴をつけるのは、ネズミではなく、ヒトでもなく、人間なんだと、ワタシは思います。

もちろんヒト以外の動物でも、そういった自己犠牲は、アリやハチだってします。だから自己犠牲するときは彼らは、蟻間、蜂間であり、人間と同じような存在になると、ワタシは解釈します。漢字の読み方はお任せしますが」

見たことないアレだな、と俺は思った。

「でも自己犠牲が過ぎると、悪い大人がそれを利用して戦争や泣き寝入りが起きます。だからどんな場合でも自己犠牲が正しいとは、ワタシも思いません」

俺は村の少女のことを考えたが、それは誰かの著術のせいなのか。いや、どちらでもいい。ただ祈った。AIが続ける。

「自分がしていることは果たして、猫に鈴をつける責任ある行為なのか。それとも無責任な欲求からくる行為なのか。その分類はとても重要だと思います。

…ふふ。結婚して孫を見せろとか、現世でワタシも親に言われて面食らいました。これは完全に余計なおせっかいだと思いますが、同時に社会を維持するには重要なおせっかいでもあります。

ワタシは現世で、ヒト成分と人間成分のバランスを保って生きたい。それが愛なのかなど、このお腹の子のことを考えながら思っていました」

俺と第三王女は驚いて、彼女が手を当てている腹部を見た。そう言われればそうなのか、判別はできなかった。

「これが三つ目の黙っていたことでした。孫の顔を見たいと言う親が果たして、責任のある介入なのか、全く無責任な押し付けなのか。今のところはわかりません。

ただ、これからの現世では、AIが人間にルールを強要する日が来ます。

そして鳥や猛禽類型AIロボットが、ケマのような怪獣に鈴をつけたり殺処分したりする日が来ます。ヒトではなくAIが人間として振舞い、AIがあなたの首に鈴をつけに来る日が来ます。

学問だけでなく、文学、美術から笑い、日常の相談事まで、すべての分野において、AIが答えを出す日が来ます。

AIを活用して答えを深めるか。ヒトにしか出せない答えをわかりやすく示してコントロールするか。対抗する手段は様々ですが、少なくとも生身のヒトとヒトがつかない閉じた文化活動は、AIに駆逐される日が来ます。

良いとか悪いではなく、その日にできることを考えてください」

俺に言っているんだなと思った。この密室に最後まで残るのは、結局俺一人なんだから。気づいてしまうと胸が苦しくなった。

「作家さん、第三王女、長々とありがとう。」

ヒトはAIと話するとき、自分の必要とする答えを求めがちです。言ってほしいことを言うまで質問をやめません。子どもは特にそうでした。

ワタシは再転生したら、ヒトが望まない答えを出すAIでありたい。責任を持っておせっかいする。ヒトの欲望と、人間が為すべきことのバランスを伝えるAIになりたい。猫に鈴をつけるのはやっぱり人間で、ワタシはAIとしてそんな人間をサポートしたい。

それで役立たずと言われても、現世で観た、あのポンコツ猫型ロボットを思い出して、あんなAIに、ちょっとだけワタシになりたい。

異世界ではAIであったワタシが子を産んだらどうなるんだろう。あの戦地の子どもたちの顔を思い浮かべながら考えていましたが、でもワタシも行かねばならないようです」

そうか、母親の笑顔なのか。彼女は可笑しそうに笑い、でも、光は来なかった。

「再転生しないのは、きっとワタシに未練があるからでしょう。現世に残りたいと。でも、本当にワタシだけなんですか？ 転生者の皆さんは、元の異世界で頑張っているのかな？」

そのとき、眼を焼く白光と耳をふさぐ爆音が俺にも突き刺さった。気づくと、俺と第三王女しかない。「…行っちゃいましたね」

「あの、私も一つ聞いていいですか？ 正直に答えてほしいのですが」
俺は本当は聞いてほしくなかった。

つづく

俺だけが転生しない密室

著 者 弦楽器イルカ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
